

ヒカリノツルギ

アフロマリモ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「深夜零時、少女は異世界へ転移し、蠢く影を照らし狩る」

この世界の苦痛から逃れるべく、自殺を選ぶが失敗に終わり、仕方なく亡霊のように生き続ける少女、ヒカリ。

自殺未遂から半年後の、深夜零時。

少女はいつの間にか、別の世界へ転移していた。そこは、おぞましい影の化け物が巣食う異世界だった。

少女は勇気を力にかえ、怪物に立ち向かう。

目次

4	3	2	1
光	蠢く影	転移	亡霊の少女
—	—	—	—
20	12	7	1

1 亡霊の少女

閑散とした家の中、ただ浴槽にお湯が注がれる音だけが響いている。

そこに彼女はいた。

彼女は番兵のごとく、片時も浴槽から目を逸らさず、ただお湯が浴槽を満たすのを待つていた。水面が八分のところまできた時、彼女は蛇口を捻りお湯を止め、浴室を出ると服を脱ぎ捨て、必要なものを持って浴室戻ってくる。

彼女は浴槽に体を沈めた。体に押しつけられた湯が浴槽から逃げていく。

彼女は持つてきたカッターナイフを右手に持ち、左の前腕に押し付け、縦に一の字を書いた。カッターナイフが細胞を引き裂く痛みに耐えるように、歯を食いしばる。

書かれた一の字は赤みがかかった黒色に染まる。心臓への行道を失った血液は、一の字の左右からそれぞれ溢れ出る。左側は排水溝へ。右側は浴槽へ流れ、湯に溶けて沈んでいく。

彼女はその様子を見ると少し安心したように、目線をそこから外し浴室の虚空を見つめ始めた。

彼女の頬を、目から溢れた涙が伝う。腕を切った痛みのせい、辛かった日々のせい

か、家族への懺悔か、涙の理由は彼女にも分からなかった。

朧気に揺れる視線で彼女は不思議なものを目にした。

蝶だ。

どこからか迷い込んだのか、はたまた幻覚か、それを確かめるために右手で涙を拭き確かめる。蝶は模様もなく真っ白で、どこか輝いているように見えた。

蝶は止まっていたブラインドを後にし、フラフラと飛び立った。そして彼女に刻み込まれた傷に止まると、優しく傷に触れた。彼女の涙がとめどなく溢れ出す。

「もうどうしたらいいのかも、どうして生きてるのかも分からないの」

彼女は嗚咽を混ぜながら、蝶に語りかけた。

蝶は少しこちらを見た。彼女は続ける。

「ごめんなさい」

彼女は全てを終わりにするために、目を閉じた。

「……生きて」

最後、彼女の耳はその言葉を確かに聞いた。

~~~~~

私の日々はただ通り過ぎていた。

食べて、寝て食べて、寝る。ただ何もせず、何も考えずに生きている。いやもう死

んでるのかも。そう錯覚するほどに何もなかった。

薄暗い部屋の中、パソコンの画面の色彩が、私の顔を照らしている。

私はベッドの上にいる。ここで一日の大半を過ごす。ここに運ばれてくる食事を食り、惰眠も貪る。カッコつけたがいわゆる引きこもりだ。

社会の理不尽に耐えきれず心が砕け、体を捨てて自由になろうとしたが失敗し、早数ヶ月、あれ半年だっけ？

本当だったらら中学3年の教室で青春を謳歌してただろう。

「つまんな」

画面の向こうの人間に悪態をつく。

(まあ、人のこととかよく言えるような立場じゃないけどね、私自身も)

自分にも悪態をつく。

一通り退屈を誤魔化せるものは、試し尽くした。アニメやらYouTubeやら映画。きつとまともな生活をしてる人には楽しく映るのだろうが、私にはどれからも快楽を感じられなかった。

湧いてくるのは自分と画面の向こうの人間の比較から来る自分への否定感と嫌悪。何を見ても、何をしてても「今の現状」というレンズを通すと歪んで見える。

いや歪んでるのは自分か。

(アニメ見よ)

You tubeを閉じようとした時、自分の部屋の扉が2回ほどノックされる。

「ヒカリ、今大丈夫？ 話があるんだけど……」

甲高い女性の声が、私の名前を呼ぶ。母親だ。

「あら、持ってきた夕飯全然食べてないじゃない。体の不健康は、精神にも影響を与えるのよ」

(精神が不健康なのは元々だよ)

心の中で返事をする。母は一切返事のしない扉に対して話し続ける。

「そうそう話したかったことはね。その……ヒカリがこんな風になっちゃって……、あ！ 光のこと責めてる訳じゃないのよ！ あなたのペースで良くなってくれればいいんだけど……」

歯切れが悪い。母はいつもこうだ。私をまるで爆発寸前の爆弾のように扱う。

「もし良かったらでいいんだけど、カウンセリングを受けてみない？」

絶対にNoだ。母は続ける。

「明日お試して受けてみない？ もし受けてもいいなと思ったら、明日の午前中に部屋から出てくれないかな。絶対に、ヒカリのためになると思うから」

扉は答えない。というか、この沈黙が答えだ。



「考えといてね」

扉の脇に置いておいた食器を持ち、パタパタと階段を降りる音が聞こえる。

左腕を見る。そこには肉の削られた跡が残っていた。もうすっかり塞がったが、生々しい傷跡が、あの日の記憶を、苦しみを鮮明に思い出させる。

いつでも思う。あの日死ねていればと。

あの日、私は全てを振り絞ってこの傷を体に刻み込んだ。

けど死神は、私の魂に興味を抱いてくれなかった。

次に目覚めたとき、私は空っぽだった。もう一度死ぬ勇気すら、心の中に残っていないかった。

こんなくだらないことを考えていても、時間は容赦なく進んでいく。

時計を見ると、深夜0時を回ろうとしていた。

(もうこんな時間か、今期のアニメでまだ見てないのあったつけ)

私は、キーボードをカタカタと叩く。

【23時59分55秒】

(これも見たし、これも見た。もう今期全部見ちゃったかもなあ)

【23時59分59秒】

(仕方ない、前期1話で切ったあのアニメでも見るか。題名なんだったつけなあ)

【00時00分00秒】

私は、まばたく。生理現象が、視界の情報を一瞬遮断する。

次に視界が開けた時、そこにパソコンの光はなく、強烈な光が私に降り注いでいた。

## 2 転移

「眩しー」

私は、腕で顔をかばいながら、急いで瞼をキュツと閉める。

恐る恐る、目を開けるとそこには、青空の頂点で煌々と世界を照らす、真つ白な太陽があつた。

(ここどこ?) 夢かな? それにしてはリアルだなあ)

頬をつねるがピリリと痛い。夢じゃないのかも……。

上体を無理やり起こす。

周りを見渡すと、大地に一面に、色とりどりのガーベラの花が咲き誇っていた。

そよ風が吹けば、花と土草の香りが、鼻腔をくすぐるだろう。

(ていうか、こんな服着てたっけ)

確か、ブサイクな猫柄の寝間着を着ていたはずだったが、私の太ももを隠しているのは純白のスカート。急いで立ち上がり全身を確認すると、その正体はワンピースのようだった。とてもじゃないがこんな服、趣味じゃないし、持ってもいない。

足元から土を踏む感触が直に伝わる。靴を履いていなかった。

腰をねじらせ自分の背面を見ると、土で汚れていたもので、はたき落とす。

汚れを落としながら、私は視界に違和感を感じる。いつもと景色が違う。

明らかに、いつもいる自室とは、異なる空間にいるのだから、当たり前だろと思うかもしれない。けどそういうことじゃなくて、もつと根本的な……

「あー！」

私は気が付く、眼前に垂れる前髪の色が、黒から白に変わっていることに、

腰まで垂れた髪を、うなじで束ね、肩超えさせ前に垂らす。

その髪は、純白に染まった絹の川のようにだった。

（ええ!? うそ!? 私の黒髪はどこに!?）

もしかして超高速で年とったのか!? 浦島太郎的な展開なのか!? と心によぎるが、

肌には、年を取ったような皺もなく、生まれたてのような、きめ細かさだった。もしかしたら以前の私よりもきれいかも。年を取ったわけではなさそうだ。

私は少しの間、自分の体の変化を楽しんだ。

楽しみ終わった私は、とうとうこの世界の考察に移ることにした。

いくつもの考察が浮かぶだろう、精神がイカれて幻覚をみている説、

宇宙人に連れ去られた説、

もともとこっちの世界が本当の世界で、向こうの世界はただの夢説など

いや、ホントはこんな思いついてない。なぜならすでに私の中では答えは決まっていたからだ。

(異世界転生ですね！間違いない！)

私は自信満々に胸を張る。

ちようどあの劣等感にまみれた世界から、おさらばしたいと思つていたところだ。ありがたい。

そろそろチート能力やら、チートアイテムが、手に入る頃合いだろう。

というか、ステータス画面とか開けないのかな。

私は、右手をかざしたり、開け！とか言つたりしてみるのが、そのような画面が開く気配はない。が別の気配が、私の周りをうろついているのを感じた。

それは、小さな光だった。蛍ほどの光をかざしながら、私の周りをクルクルと飛び回っている。

私は、ハツとした。

(ハハーン、さてはこの光が、私に眠る強大な力のカギだな！)

私は瞬時に推理する。伊達に異世界転生ものを読み漁っているわけではない。

この光……いや光って呼び方はよそう。私と被る。

そうだなあ、とりあえずこの光は「蛍」と命名しよう。

蛍は程なくして、私から離れていく。

「待って！ 蛍」

私は蛍を呼び止める。そうすると蛍は少し止まる。そしてまた少し進み、また止まる。

(ついて来いってことかな)

確信の持てぬまま、鮮やかなガーベラの花を踏みつぶさないように蛍についていく。

歩き続けていると、永遠に続くと思われたガーベラ畑は終わりを迎え、森林が私を出迎える。

木々が、ところ狭しと生えているにもかかわらず、木漏れ日が差し込むおかげで、程よい明るさが私の行く先を照らす。

蛍はためらいなく森の中へ入っていく。

隆起した木の根っこに足を奪われないように、慎重に蛍の後を追う。

(蛍のお供って、なんだかおじやる○みたいだなあ、あとは閻魔様の尺があれば完璧なんだけど)

20分近く歩き続けると森は終わり、一つの村につく。村だったものの方が正しいかも。

そこには人の気配はなく、壊れた家屋達が存在を主張するだけだった。

蛸はウロウロと動いた後、村の中へと飛んでいく。

「はあ……はあ……、ちよつと待つてよ！ どこ行くの？」

私の声を無視し、小さな光はどこかへ消えていく。慣れない道を歩いたせいか、足には疲労がたまり、追いかける体力は残っていなかった。

(私のこと導いてくれるんじゃないの?)

最強の能力を期待してついでにきた、私にとって、このボロボロ村はあまりにも期待外れだった。

(とりあえず、休める場所を探そう。足パンパンだよ、もう！)

私はイライラしながら、村を探索する。ところどころガラスの破片が散らばっていて、素足には脅威だった。

脅威を躲しながら、トコトコと村の中心に向かって歩いていく。そこには屋根の吹き飛んだ広い家のようなものがあった。

太陽が沈もうと、遠くに見える山脈に、体を隠し始めていた。探索しているうちに、時間が結構すぎていたみたいだ。

(もういいや、ここで休もう。最強チート能力は明日あたりにももらえるでしょ)

私は、屋根の無い大きな家に泊めさせて頂くことにした。

## 3 蠢く影

「……おじやましませーす」

もちろん誰もいないが、念の為。

扉を開け中に入ると、そこには夕暮れに照らされた長椅子が並べられていた。壁も穴だらけでほとんどその役割は果たせておらず、周りの家屋が見えるほどだった。

(ほとんど張りぼてじゃん、この家)

手近な長椅子に腰掛ける。何がこの村に起こったのだろう。凶暴なモンスターでもいるのだろうか、それとも災害か……。

思考を巡らせていると、空が丸々見えるほど、大きな穴の空いた天井から蛍が入ってくる。

「蛍！ どこ行つてたの？」

蛍はフラフラとこちらに向かい、私の膝元にふわりと着地する。それと同時に、夕暮れは終わり漆黒が空を染め上げる。そこには満点の星も、真っ白の満月も存在せず。どこまでも暗かった。

その暗闇が、この大地にも降りかかる。蛍のおかげでかろうじて周りを見ることがで



きるが、もしいかなかったら私は一寸先すらまともに見ることができなかつただろう。  
(いくら何でも暗すぎでしよ、どうなってるの?)

壁の穴から、外の様子を伺う。隣の家屋とある程度、距離があるので、遠くの山々まで見えるはずが、見えない。その代わりに、その山があつたであろう場所からは、私たちの世界では存在しえないものが、顔を覗かせていた。

それは黒い太陽だつた。

そうとしか表現できなかつた。

ずっと見つめていると吸い込まれてしまうほど暗く、形容しがたい明るさを兼ね備えている。

黒いのに確かに輝いていた。

(何……、あれ)

昼間の私なら、まあ、異世界だからね！ と言える余裕があつただろう。

だが今の私の心に湧き出るのは、本能的な恐怖だつた。理由はわからない。ただどうしてもこの状況が怖くてたまらなかつた。

ここにいたら死ぬ。ただそう感じた。

私は急いで、その家屋を飛び出す。

(ここは危ない。何故か分からないけど、ここにいちやいけない気がする)

逃げなきや。私は走り出す。並走するように蛍もついてきて、私の進む道を照らしてくれている。

「ありがとう。蛍」

一刻も早くここから離れなきや、もっと明るいところへ。

無意識に光を渴望する自分。

最短距離で村を出ようと道をまっすぐ進み続ける。

(あれ?)

私の視界が何かを捉えた。

曲道の先に一瞬何、移ったような気がし、そちらを二度見する。

そこには人がいた。

(人だ、昼間はいなかったのに)

私は、村を出ようとする足を止めその人に近づく。

「あのお……、すいません」

恐る恐る声をかけるが、反応しない。

(聞こえてないのかな)

蛍は、顔の周りを飛び回り、邪魔をしてくる。

「ちよつと邪魔だつて」

手で螢を追い払い、人に近づく。

目と鼻の先までの距離になったとき、私は気づいた。それは人ではなかった。人の形をした影だった。その影は生きていた。

影はこちらに振り向く。

どこまでも暗い眼腔が、こちらを捉える

「あ……、え……」

恐怖に声が詰まる。

影はにやりと嗤う。異様に白い歯が覗く。

急いで逃げようとするが、影は私の腕をつかむ。

その手は不気味なほど冷たかった。恐怖がその冷たさに乗って体に流れ込んでくる。

血の気が引き、頭が真っ白になる。

「いやー、離してー!」

そう言つて離してくれるはずもなく。私は無理やり引き離そうとするが、なぜか私から触れることができず、すり抜けてしまう。

「うそ?! なんて?! 助けて! 誰か!」

その叫びは誰にも届くことはなく、どこまでも続く暗闇に吸い込まれる。

影がもう一方の手を、私に伸ばそうとしてくる。

「こつち来ないで！　お願い……」

涙ぐみながら懇願する。

その時、小さな光が、影と私を割って入る。

影はその光を嫌がり、私の腕をつかむのをやめ、自らの顔を覆うことに手を使う。

当然手を離され、尻餅をつくが、手と足を目いっぱい使い、這いずり逃げる。

(なんなのこつち?!　何あの化け物?!)

心の中で驚愕しながら、全力で逃げる。蛍が目の前におらず周りが、ほとんど見えな  
い。

そんなことお構いなしに、逃げ続ける。

突然、足の裏に激痛が走り、足がもつれ転ぶ。

「痛てっ！　はぁ……はぁ……、もう最悪」

疲れと痛みで体が震え、涙が止まらない。

足の裏を見るとガラスの破片が刺さっていた。私の血で赤く染まった、破片を抜き取り歩き出そうとするが、痛みでうまく進めない。

(こんなことになるなんて、こんな私の知ってる異世界転生じゃない。ここは地獄だよ)

少しずつ進んでいると、急に周りが明るくなる。

蛭だ。

「大丈夫だったのね！　ありがとう、さっきは本当に」

お礼をいう。てつきり私をかばって食われたと思つたが、無事だったなんて。

蛭は私の周りを心配するように飛び回り、進むべき道を照らした。

痛む足裏をかばいながら、村の外を指す。

後ろからうめき声が聞こえる。後ろをチラリと見ると、そこに影たちがいた。一匹だけでは何匹も。

（嘘!?　こんなにいたの!　昼間は何もいなかったはずなのに）

私は、追いつかれまいとペースを上げようと前を向くが、思わず足を止めてしまう。

蛭が照らし出した道の先に、巨大な暗影が蠢く。

後ろから追いかけてくる、人型の影の何倍も大きく、おぞましかった。

頭は無く、首の部分から黒いタールのようなものが溢れ、ポコポコと泡を膨らませては割つてを繰り返す。その泡は人の顔のようにも見える。

腕は分厚い胴体と、釣り合わない細さで、指先からは長く真つ黒な爪が生えていた。

胴体に横の切れ込みが入り、そこから白い歯が覗く。

「ヒザジブリ　ノ　ゴバン」

化け物はこちらに気が付くと、いくつもの重低音が重なったような声でしゃべる。

「あ……、あ……」

足が一步も動かなくなりその場にへたり込む。逃げなきやいけないことは分かっているが、体が動かない。体は私ではなく、恐怖に支配されていた。

蛍が、暗影の周りを飛び回るが、人型の影とは違い、怯む様子もなく、迷いなく気色悪い右手で、私をつかみ上げる。全身がひんやりとした影に包まれる。

「オイジゾウ ヤワラガゾウ」

私は何とかして、逃げられないか身をよじり暴れるが、びくともしない。

怪物は左手を私に近づける。

「もう嫌！ 早く夢なら覚めて！ 異世界転生なら力に目覚めて！」

怪物は長い爪を、私の右太ももに突き刺す。

ずぶずぶと私の肉を掻き分け、貫通する。

「あが……い……あ」

あまりの激痛に、叫び声すらまともに出なかった。

死が迫っていた。あれほど望んだものが目の前に。

涙が溢れ、体が痙攣する。

激痛に耐えられず、意識が徐々に遠くなっていく。

薄れゆく意識の中、私は思った。

(あんなに……死にたかつたのに、今は……ただ死ぬのが怖い。意識を手放したくない)

「死に……たく、ないよお……うう、怖い……よお」

「イダダギマズ」

怪物はそう言うと、私を自分の大口に放り込む。

そこで私の意識は途絶えた。

4  
光

「ほわあああ!!」

私は、変な声を上げながら飛び起きると同時に、周囲を確認する。いつもの部屋だ！

次に全身の確認をする。ブサイクな猫柄の寝間着に黒い髪！そして急いでズボンを下げる。健全な太ももヨシ！ 傷跡もない。

「夢かあ」

安堵し、布団に倒れこむ。スマホの時間を確認すると、4時と表示されている。

(寝落ちしてたんだ。リアルすぎて本当に怖かったあ……とりあえず顔洗おう)

まだ日も出ていない時間帯だが、その方が都合はいい、家族と顔を合わせるリスクが  
少ないからね。

ゆつくりとドアを開け、ゆつくりと階段を降り、1階の洗面所へ向かう。さつきみた  
いな夢を見た後だと、暗闇が怖くてスムーズに行けないと思ってたかが、案外明るくて  
大丈夫だった。

洗面所につくと、蛇口を捻る。出てきた水を、顔いっぱいにつけまくる。あの影た



ちの冷たさとは全く違う、心地よい冷たさが肌に触れる。

タオルで、顔に残る水の残党を拭き取り、鏡に映る自分の姿を見る。疲れ切った顔で、毛先は乱れ、顔色もあまりよくないように感じた。

「ひどい顔」

思わず呟く。

「そんなことないよ！　ヒカリは可愛いよ！」

快活な女の子の声が、私を励ましてくれる。

「お世辞なんて言われてもうれしくないよ」

私は否定する。

「お世辞じゃないよ！　もっと自信を持とうよ！」

「自信なんて……持ってって言われて持てるものじゃ……」

私はさらなる激励を否定しようと……、待て、私は今誰と話しているんだ？

声のした、右の方を見る。

そこにはふわふわと浮かぶ光源がいた。

「あのねえ、ヒカリ！　自分を卑下するのはよくないよ！　自分は、どんな時も自分の味

方じゃないといけん」

私に見られていることに気が付いた光源は、しゃべるのをやめ、こちらを見る。いや

別にその光源に、明らかな目が存在しているのかは定かじやないけど、確かにこつちを見たような気がした。

「……」

お互いに無言で見つめ合う。光源が口火を切る。

「あのお……私の事見えてる?」

その問いに、私は無言でうなずく。

小さな光は嬉しそうに周りを飛び回る。

「ヒカりに憑いて、早半年! まったく私の事、認知してくれないから心配したよお」

啞然とする私をよそに、光は騒ぎまくる。

「ホントに見えてる? ホントに声聞こえてる?」

嬉しそうに何度も質問を繰り返す。

「じゃあさ、じゃあさ! これ何本に見える? 見える?」

きつと指の数のことを質問しているのだろうが、この光源にそれらしい器官は見当たらず返答に困る。

「え……何も見えない……です」

何とか絞り出した回答に、光源は残念そうに、ええ——!! と声を上げる。

「やっぱり見えてないんじゃない!」

そう言った後、ハツとしたように

「あ！ そういえば私、手無いんだった！ テヘっ！」

このお茶目で頭の足りない光とともに、非日常が訪れた。